一宮基督教研究所

ICI Theological Report

第1巻　第1号

発行日 2004.12. 3

私もすべてのことを初めから

教会とリタージー

先日、日本福音主義神学会西部部会秋季研究会が、神戸改革派神学校で開催されました。私はコーディネーターのひとりとして奉仕に参画させていただき、全体の総括を担当させていただきました。はじめてでありましたが、個人的にはとても良い経験となりました。

今日は「ウィークリー電子メール講義」の配信の日でありますが、そのときの「総括」を整理してお分かちすることもまたICIの働きとしまして有益なのではないだろうかと思い、以下に書き留めていきたいと思います。他にもレポートをまとめておられる方もありますが、ルカ福音書の序文にもありますように、私も教えられたポイントを拾い集め、固有の視点から整理しておくことは有益なことと思い、書き留めておく次第です。

「総括」は、発表してくださる諸先生方が前もって提出してくださっていましたレジュメを参考におおまかな「総括メモ(PP資料参照)」を作成していましたが、諸先生方の研究会における発表をお聞きした上で、その脈絡を踏まえ、修正しつつ総括させていただきました。

開会礼拝、分科会そして午後の諸講演においてふれられました幾つかのポイントを抽出し、評価することによって「総括」とさせていただきました。

ルカによる福音書 1:1-3
「私たちの間ですでに確信されている出来事については多くの人が記事にまとめて書き上げようとすでに試みておりますので初めからの目撃者でみことばに仕える者となった人々が私たちに伝えたそのとおりを私もすべてのことを初めから綿密に調べておりますからあなたのために順序を立てて書いて差し上げるのがよいと思います。」

「リタージー」という用語

心に留まりました第一のポイントは、広義の意味で、ほぼすべての先生が「リタージーの定義」から話し始められ、原語の「レイトゥルギア」にふれておられたということです。

「リタージー」という用語は、①洗礼や聖餐の聖礼典、②礼拝形式や式文等、③原語「レイトゥルギア」から「他者の益となるためになされる人々」ー「礼拝参加者が共に礼拝を守るために各人がそれぞれの役割を積極的に果たしている状態」を指す場合、と多様な意味で使用されています。

最も広い、包括的な視点から入ることは、福音主義者として包括的なスタンスに立ちつつ、その視野の中で教派的な個性を扱うという意味で“建徳的な”入り方であったと思います。

目次:

私もすべてのことを初めから 1
「リタージー」という用語 1
「リタージー」と「霊性」の対比 2
「聖餐論」と「賛美論」について 2
敬意を伴った相互理解を 2

「リタージー」と「霊性」の対比

リタージーと霊性

第二のポイントは、テーマにもありますが「リタージー」と「霊性」の対比した扱いです。この主題は、キリスト教的生活にどっぷりとつかっていますと少し分かりにくいものとなるように思います。

これを一般の宗教の視点から考えますと、H. ドーイヴェルトや稲垣久和氏が提示されている「形式」と「原質」ということになるのではないかと思います。キリスト教の視点からいきますと、丸山忠孝師の「秩序的側面」と「自由指向的側面」、宇田進師の「制度的側面」と「出来事的側面」との記述となり、これらは「教会組織における秩序とカリスマ間の調和とバランスは、教会のあり方を決定する」、「両面を根と実との相互関係のようにひとつ不可分な運動として捉えるのでなければ教会の着実な伸展に資する健全な理解とはいえない」と述べられています。

著名な礼拝学者のJ. F. ホワイトは「礼拝学」は「記述しやすい領域という点で“固定された諸様式”に比重がかかりやすいのであるが、表現が困難な“自発性”の領域に取り組むことは大きな課題である」と指摘しています。このような指摘に留意することは大切と思います。

「聖餐論」と「賛美論」について

第三のポイントは、狭義の意味での「リタージー」において取り上げられました「聖餐論」と「賛美論」についてです。

「聖餐論」につきましては、ルター派諸教会や日本イエス・キリスト教団の現況についてレポートがありました。その中で心にとまりましたのは、一方には伝統的脈絡を重視する“規範的な対応”と、他方には今日的な脈絡を配慮する“コンテクスチュアルな対応”との二つのベクトル(方向性)がともに働いていることを教えられました。

「賛美論」につきましては、改革長老派の「礼拝賛美の捉え方」に対して熱心な質疑がなされました。聞いていまして個人的には、春名純人氏の“対立の原理”と“関係の原理”の記述を思い起こしていました。白熱する議論の中に「礼拝賛美の貧困化」なのか、それとも「礼拝賛美の世俗化」なのか、礼拝についての聖書的規範をどのように理解し、その規範に基づいて今日の文化の中に根を張る教会はどのように礼拝賛美を展開すべきなのかを考えさせられました。今回配本の神学誌のテーマは「賛美」ということですのでこれにも期待したいと思います。

敬意を伴った相互理解を

聖餐論と賛美論

まとめとなりますが、「リタージー」と「霊性」の扱いは、モザイクと言われる福音派においては教派においての広い多様性が存在しているということです。今回の研究会議で、礼拝伝統の領域において、私たちは福音派としての“共通項”と教派としての“多様性”を幾つかの要素を検討していく中で学びました。私たちは共通の基盤に立ちつつ、異なった教派の神学的立場、信条、理念、礼拝観、聖餐論、賛美論等についての理解を“敬意を伴った相互理解”をもって深めていきたいと思います。

一宮基督教研究所

兵庫県宍粟郡一宮町安黒332
安黒　務

電話　0790(63)0252
Fax　0790(63)0252
Email　aguro@mth.biglobe.ne.jp

Http://www.aguro.jp/